



談笑するトンブ村の人々(インドネシア・スラウェシ島)

活動レポート

- ◆いりあい交流 2
- ◆西バリ国立公園プロジェクト 4

特集・まなびあいの楽しさ・力

- ◆JICA研修協力にみる、まなびあいの楽しさ・力 6
- ◆あいあいネット理事対談 8

コラム

- ◆事務局短信 7
- ◆私のオススメ地域 12
- お知らせ 12

2010.11

Vol. 1



いりあい・よりあい通信

一般社団法人あいあいネット(いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク)

あいあいネットのニュースレター「いりあい・よりあい通信」が始まりました。日本と世界の様々な所で活動し、メンバーも日本と海外を行ったり来たり。一見バラバラでまとまりのないような私達をつなぐ1本の糸が、「いりあい・よりあい・まなびあい」です。あいあいネットの活動やそこに関わる人々の思いを、いりあい・よりあいの糸で綴じ、皆さまにお届けします。

2010年度あいあいネット総会



写真上: 総会の様子

写真下: 会場となったギャラリーゆうど



8月下旬、正会員6名とオブザーバー5名が参加して、あいあいネットの定期総会を開催しました。法人格を取得して最初の1年間が終わり、その活動を参加した皆さんと改めて振り返りました。またこれから1年間、そしてその先の計画についても話をしました。

総会の後はいりあい交流第二弾「中スラウェシ・山の民の生活世界—映像記録の共同制作を軸とした山村文化の再評価と学びあい」で制作した、中スラウェシの山村の慣習や文化を記録した映像の上映会を開催しました。今回はトンブ集落における森の伐開儀礼の様子を上映し、トンブ集落の最近の変化についてや記録映像のテロップのつけ方についてなど、色々な質問が飛び交いました。

新しい仲間が加わりました!

10月から2011年3月末まで、あいあいネットにインターンが加わる事になりました!



初めまして、高橋博と申します。以前はボランティアとしてあいあいネットでお手伝いしていましたが、2年間のブルキナファソ生活を経て、今度はインターンとして勉強させていただくこととなりました。ブルキナファソでの経験から私自身の今後の課題となった「コミュニティ開発」や「ファシリテーション」について、このインターンを通じて一つでも多くのことを学びたいと思います。皆さま、どうぞよろしくお願ひします。

トゥプの宿る村ーいりあい交流で訪れた焼畑の不思議な世界

増田和也(あいあいネット理事)／島上宗子(あいあいネット副代表理事)

いりあい交流では、森を活かし、守ってきた山村の暮らしに学ぼうと、日本とインドネシアの山村どうし、マチとムラをつなぐ取り組みを続けています。そのようななか、つきあいが始まったのがトンプ集落※1です。スラウェシ島の真ん中に位置するのが中スラウェシ州。山がちな地形で、州都パルのすぐ近くまで山地が迫っています。トンプ集落はパルにほど近い山の上にあります。人の暮らしが認められない森林区域に指定されてしまったことから、故郷にありながら”不法”居住状態になってしまったトンプの人びと。最初は森をめぐるムラの慣習的な権利について学び合おうとトンプに向かったのですが、その根っこに広がるトンプの奥深い世界に引き込まれていったのでした……。

■ トンプの奥深い世界との出会い

「陸稲とトウモロコシを収穫したら、ウンジャ(vunja)という儀礼をやるんだ。この儀礼はいつもやらなくてもよい。人間に苦しみをもたらすものがトウモロコシだったら、トウモロコシを収穫するときに、陸稲だったら陸稲を収穫するときにやるんだ。星が作物を突らせる。三つ星はトウモロコシ。たくさんある星は粟の星。粟の本当の名は……」

2006年6月、インドネシアから6名の人びとを招き、日本の山村を廻ったときのこと。ある晩、トンプからやってきたパパ・ジャニに焼畑について尋ねていたら、こんな話になりました。

「どうして陸稲とトウモロコシと粟なの？」(シマガミ)

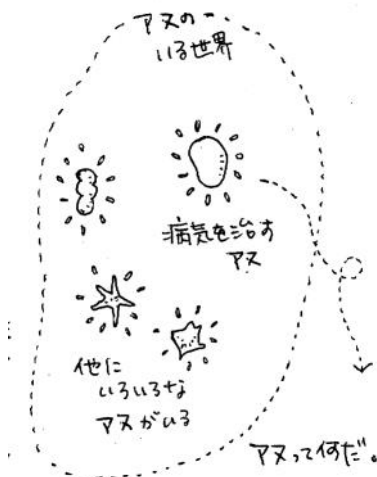
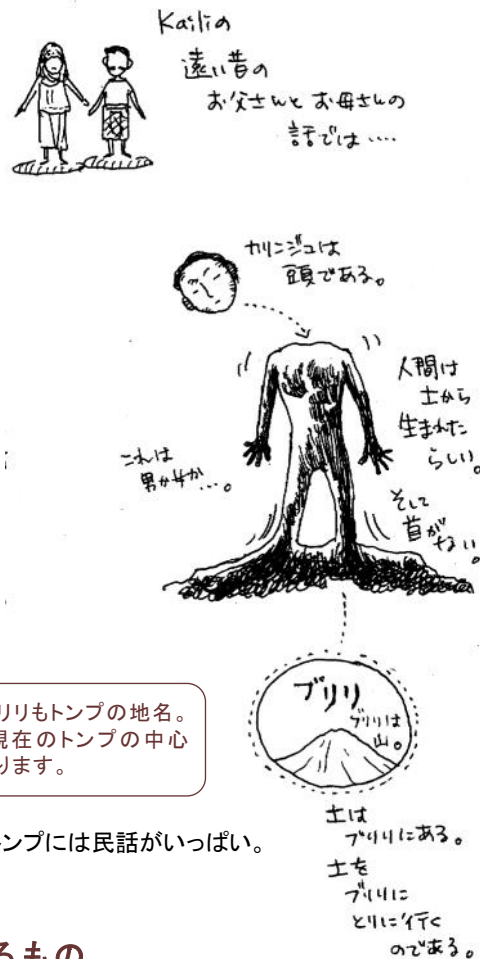
「それは長い話になる。三夜七夜の約束だ……。説明するには1年あっても足りない」(パパ・ジャニ)

「????????」(シマガミ)

これがトンプの「ディープな」世界との最初の出会いでした。

パパ・ジャニの本名はラングさん。スラウェシの山間部では、子どもが生まれると「パパ・〇〇(子どもの名前)のパパ」(つまり、〇〇の父さん)、あるいは「ママ・〇〇」といったかたちで呼ばれるようになります。

カリンジュもブリリもトンプの地名。カリンジュは現在のトンプの中心的な集落があります。



「アヌ」は固有名詞ではなく、日本語でいう「あれ」を意味します。直接名前を呼ぶことができないようなものなのでしょう。

■ トンプのリズムを司るもの

パパ・ジャニによると、すべてのもの(生きとし生けるもの)には、「トゥプ」が宿っているといいます。トゥプには「先祖」「所有者」「カミ」といった意味があるそうです。また、アニトゥとよばれる魂(精霊?)もたくさんいます。トンプでは、作物に病害がでたり、病人が多くでると、アニトゥと人間の関係が崩れた、とみなされます。そして、両者の関係を修復するためにおこなわれるのがウンジャとよばれる儀礼です。

ウンジャを司るのは、サンドとよばれる霊的能力をもった人物。トンプには「5の慣習」と「7の慣習」があって、儀礼のかたちや進め方はこの二つで異なるといいます。サンドも違えば、星や月との関係も違い、約束も違う。祭壇は三本柱と四本柱。三本柱はト・マヌル(??)で、普通は四本柱。世界は四角だからね……。???(確かに1年あっても足りないかも……)。

※1 トンプ集落の場所は11ページ参照

■読めないリズム

ウンジャは収穫後に行われる儀礼です。ウンジャの実施が決まると、「ウンジャ用焼畑」を拓くことから始まります。そして、この伐開作業にあたってはメブイとよばれる儀礼が行われます。

数年ぶりにメブイが行われるという話になりました。けれども、その時期を幾度尋ねてもはっきりとした答えが返ってきません。以前、焼畑の火入れを実際に見たくて、その予定をパパ・ジャニに尋ねたことがあります。すると「そういうことを聞いてはいけない。アニトゥが聞きつけて、雨を降らしてしまい、火入れができなくなる」というのです。そのため、火入れの予定を尋ねることもできず、ただただ「そのとき」を待つしかありませんでした。同じように、メブイについても、ただただ「そのとき」を待ちわびるばかりでした。

2008年6月、「明後日、メブイだぞ」との知らせがパパ・ジャニから入りました。パルに滞在していたシマガミとカメラマンのダフィット※2は大慌てでトンブに登りました。前日から儀礼用のニワトリなどが用意され、麓の集落からサンドもやってきました。「いよいよ」と思われたのですが、儀式はなかなか始まりません。サンドと長老たちが何やら話し合った末の結論は「今日はとりやめ」ということ。サンドがよくない予兆を感じたのだそうです。こうして、シマガミ・ダフィットは再び「そのとき」を待つことになり、いったんパルに下りたのでした。

3日後、パパ・ジャニの連絡を受けて、2人は再びトンブに。今度は無事にメブイは執り行われ、この時の様子を撮影したものがDVDとしてまとめられました。

『いりあい交流』では、現地の若者たちとともにトンブの奥深〜い世界を映像・文章・絵で記録する作業を進めています。

その記録作業に関わっている主な日本人メンバーは下記のとおりです。

シマガミ

「いりあい交流」
まとめ役。



マスダ

サポート役。食べる、歌うことで場を和ませる。



澤幡さん

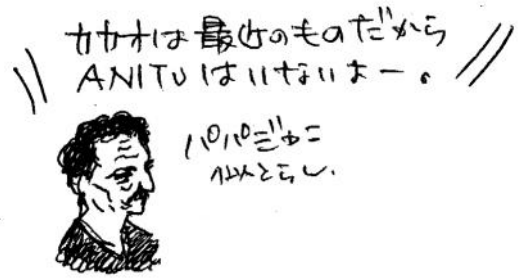
いつも冷静に、かつ熱い想いと優しい眼差し
のベテラン・映像カメラマン。



岩井さん

トンブでパパパッとイラストを描くので、大人からも子どもからも大人気。

※4コマ漫画以外の絵は岩井さんのフィールドノートからの抜粋です。



■すべてに時あり

パパ・ジャニやママ・ジャニに質問をすると、ときどき何だか話しくそうにすることがあります。どうも、ものごとには話して「よい時」と「よくない時」があるらしいのです。これは「時」だけでなく、「場所」も同じようです。森では話してはいけないこと、刈り取った稲の前では話してはいけないこと、トンブから持ち出してはいけないもの……。すべてのものごとには、それぞれにふさわしい「時」や「場所」があるのでしよう。

ものごとは思いどおりに、人間の都合だけでは決められない。トンブの森と人との関わりは、そのようなリズムでゆらりゆらりと続いています。

■おまけ (作: / 画) →

ダンブは地名。ちょっと遠いところにある。



トンブで先を読めないのは、必ずしもアニトゥのためだけではない……。まだまだ続く「いりあい交流」。



西部バリ国立公園

あいあいネットとの1年～西部バリ国立公園にて～

エリザベス R.P. / インドネシア・ボゴール在住
(あいあいネット・西部バリ国立公園プロジェクト担当専門家)

これってどういう研修？

2009年4月28日は、私が初めて「西部バリ国立公園における協働関係構築」プロジェクトに関わり始めた日です。これはあいあいネットが同国立公園と共同で行う活動で、公園の現場職員が従来のやり方とは違い、外から何も持ち込まずに周辺の住民たちの自主的な活動のイニシアティブを引き出すことを目標に、ファシリテーターとしての能力を育成する研修を活動の柱としています。この時、私の頭にあったのは、「どうやったら公園職員にこの研修に興味を持ってもらえるだろうか」ということでした。というのも、彼らは予算と事業計画に縛られる国家公務員であり、通常のルーティン業務がたくさんある中で、この研修に参加しなければならないからです。そしてまた私の頭を悩ませていたのは、1週間の研修の後、次の研修まで3ヶ月も間が空いてしまうことでした。この研修は継続して行なう必要があるのに、あいあいネットから西バリに日本人がやってこられるのは、3ヵ月後だったのです。

う～ん。彼ら（職員たち）は持続できるんだろうか？…これが最初の私の心配事でした。私たちがやりたいのは、連続した研修シリーズのようなもの

で、そこでは、次の研修に参加する前には、前の研修で学んだことを各自が現場で実践している必要があります。しかし、私が研修を開始して参加者の職員たちの表情をみると、みんな困惑しているようでした。彼らはこんな質問さえしました。「これって、いったいどういう研修なんだ？」…カリキュラムもはっきりせず、時間割もなく、彼らがこれまで通常受けてきた林業省の研修とは全く違います。彼らは、研修でやる内容を既に知っているつもりになっていたと思います。

西部バリ国立公園とあいあいネットとの協力は、一人の公園職員（森林警護官）ワワン氏と、山田理恵さん（あいあいネット理事）との出会いから始まりました。ワワン氏は2004年11月、バリ島の固有種で絶滅の危機にあるカンムリシロムク保護に関する研修に参加するため来日しましたが、その研修の監理員^{※1}をしていたのが山田さんです。ワワンさんはその時、「国立公園内のカンムリシロムク密猟を止めるには、公園と周辺コミュニティとの協力関係が必要で、そのためには両者をつなぐファシリテーターが必要だ」と語ったそうです。その頃の国立公園職員はコミュニティで活動するファシリテーター

※1 研修監理員…JICAや政府機関、地方公共団体などが日本国内で外国人向けに実施する研修コースで、通訳や各種調整業務を担当する。

に必要な知識や技術を持っていませんでした。そこであいあいネットは、日本の地域づくりの経験や、インドネシアで日本のNGO関係者が関わって行なったコミュニティ・ファシリテーター養成のための人材育成プロジェクト（PKPMプロジェクト）の経験や技術を活かして、何らかの貢献ができるのでは、と考えました。そしてカンムリシロムクの保護という共通の課題もあり、国立公園とあいあいネットとの協働が開始されたのです。

参加者たちはいつも考えさせられた

あいあいネットによる一連の研修は、外部者の言うことを信じるのではなく、自分たち自身が考え、情報を掘り下げていくことを重視しています。なぜなら、これまで長い間、私たちは外部の人が言うことを簡単に信じ込んできて、その結果、外部の人たちへの依存が生まれてしまったからです。研修では、参加した人たちが自ら考え、自分たちの経験による知識を掘り下げ、各セッションに継続して参加することによって、最後には自分自身で答えを見つけることができるようになります。

そして最後には私自身もまた、先述した疑問や心配事への答えを見つけることができました。今年1月にJICAから訪問した評価チームとの会合で、公園職員のチームメンバーたちは、次のように語ってくれました。



- ◆研修の雰囲気がおもしろい。また研修生とファシリテーターとの間に双方向のやりとりがある。
- ◆講師で来てくださる方は、単なる理論でなくご自身のコミュニティでの実践経験をもとに話してくれ、興味深い学びとなった。
- ◆カリキュラムがあるわけではなく、自分たちで考えないといけない。
- ◆この研修を通じてコミュニティの人たちと話をするようになり、彼らが実はとっても能力があることがわかった。今ではコミュニティの人たちは敵ではなく友だと思っている。
- ◆コミュニティの人たちから学べることが多く、今はもう、何かを提供しようとは思わない。
- ◆コミュニティの能力育成は一朝一夕にはならず、プロセスが大事だ。
- ◆村についての情報を収集し、分析することについて、より細かく、上手にできるようになった。
- ◆研修を受けて最初は特に変わったこともなく普通の研修だと思ったが、次第に興味が増してきた。この方法はとってもすばらしい。

私たちの研修に参加している公園職員の数は、最初14名だったのが、今は9名に減っています。これは決して活動が失敗に終わったことを意味するものではありません。なぜなら、14×0はゼロですが、9×1は9だからです。複数の参加者たちが、学んだことを現場で実践できるようになり、コミュニティ・ファシリテーターとなって、西バリ流の地域づくりの経験を他の人たちに伝えられるようになると思います。そして願わくば、いずれ地元のコミュニティの中からファシリテーターが生まれますように！



エリザベス氏(左から2番目)とチームのメンバーたち

研修の様子: (上)お互いに気づき、学びあう研修 / (中)村でのインタビュー。村の人の話に耳を傾ける

JICA研修協力にみる、まなびあいの楽しさ・力

長畑誠（あいあいネット専務理事）

あいあいネットが活動を開始したばかりの2004年11月、私たちはJICA（国際協力機構）の研修員受入事業の一環で、アジアから来日した9名のNGOリーダー・行政官とともに、熊本県水俣市を訪れた。この時水俣では、「地元学」の創始者であり推進者である吉本哲郎氏のお話や、住民の方々の積極的な活動が見られる寒川や頭石地区さむかわ かぐめいしの訪問、そして地元学のエッセンスの実習、という充実したプログラムを組んでいただいていた。だが、初めて研修員を連れていく私たちには、「果たして地元学というものを理解してもらえるだろうか」という不安が強くあった。日本とは経済状況も文化のあり方も異なる『途上国』の人にとって、日本の農山村は「道路や橋が完備している」「様々な施設がある」「みんな車を持ち、電化製品も揃っている」進んだ国で、それと比べて自分たちは遅れている、だから学びようがない、と思われてしまうのではないか……。

ところが、実際に水俣の集落を歩き、地域での活動を見聞きすると、研修員たちの表情がみるみる変わり、積極的になっていった。特に、頭石地区で行なわれている「村まるごと生活博物館」の現場が研修員たちの目を開かせてくれた。水俣での最終日、まとめの場では、「自分たちはこれまで現場で『ないもの＝問題点』ばかりを指摘して仕事をしてきたが、それではいけないことに気づいた」「地域にあるものを探し、それを活用していこうとすることが大事」という発見を複数の研修員が語っていた。



地元の方と一緒に集落を歩く(熊本県水俣市)

私たちはその後もJICA研修の受入れを継続し、これまでに30カ国以上から約150名の人々が、水俣を含め、日本の各地で地域づくりの現場を訪れてきた。昨年も熊本県菊池市の水源地区における住民主体のグリーンツーリズムの現場にお邪魔し、2010年は新潟県上越市や岐阜県高山市等での研修を予定している。日本の地域での実践が、歴史も社会も経済状況も異なる『途上国』の人たちと共鳴し、出会いと「学びあい」の化学変化が起きているのである。



地元の人との交流(熊本県菊池市)

長い人間の歴史の中、人々は生産活動を行い、衣食住の必要を満たし、子どもを育て、年老いていくその過程で、お互いの助け合いや共同作業を必要としてきた。それが地域コミュニティの大きな役割であった。ところが、現代社会では、人々は生活に必要なさまざまなサービスを、公的な機関に供給してもらうようになってきている。そして人々は多くの現金を必要とし、隣近所の助け合いや共同作業よりも、個人がいかにか収入を増やすかに価値を置くようになってきた。こうしたことが、地域の間人間関係に変化をもたらし、コミュニティの衰退、といわれるような状況が、多かれ少なかれ、世界中で起きているのである。

私たちが実施するJICA研修では、「あなたのコミュニティでは近年どんな変化が起きているだろうか」を思い出してもらっている。「伝統的な生活技術が廃れてきた」「若者はみんな都会へ出てしまった」「いまは何でも現金がないと生活できない」

「村人の共同での農作業や一緒に食事をする機会が減ってきた」といった具体的な変化が多く挙げられる。濃淡の違いはあっても、ここ数十年の日本で起きたことが、アジア、中南米、アフリカ、大洋州どの地域でも起きているのだ。

だが、いま私たちが抱える様々な課題は、政府や企業に頼っているだけでは解決できないことが明らかになっている。コミュニティの人たちが自ら立ち上がり、外部の力をうまく使いながら、自分たちの

課題解決のために動き出すしかない、という状況が日本でも海外でも共通して存在している。住民が自ら動き出すために、外部者は何をどうしなければいけないのか。住民自身はどう動いていったらいいのか。日本と海外の豊かな実践例を掘り起こし、繋ぎ、学びあう活動をこれからも展開していきたい。

事務局短信

消えたトマトに思いをはせて

高田尚子（あいあいネット事務局）

あいあいネットの事務所は東京の都心、高田馬場駅から徒歩ですぐの所にあります。ビルや住宅に囲まれたその環境は、約1年前、東京に来たばかりの頃には、少し息が詰まるように感じる事もありました。そんな中で事務所の窓から見えるトマトや大葉の“畑”は、ほっと心が安らぐ風景でした。

私が見ていた畑、それは事務所の隣のアパート前にある畑です。小道の脇のスペースを利用した、トマトと大葉合わせて20本位植えたらいっぱいになる、とてもささやかな畑です。畑の前のアパートに住むおじいちゃんが、大家さんに交渉して畑として使わせてもらっている場所でした。毎朝事務所に来ると、おじいちゃんはいつも畑で野菜の世話をしている、トマトや大葉の育て方を教えてくださいました。おじいちゃんと話をしていたのは私だけではなく、近所の人たちとおじいちゃんが楽しそうによもやま話をしている姿をよく見かけました。

トマトの収穫が目前にせまった夏のある日、朝出勤してきたら、真っ赤に熟れたトマトも大葉も、全てきれいなくなっていました。どうやら近所の仲の良い人に、作物の茎を全部切られてしまって、トマトも大葉も全てダメになってしまったらしいのです。残念そうに肩を落として、枯れてしまった作物を片づけていたおじいちゃんの姿が頭から離れません。

田んぼや畑で実った作物、考えてみたら誰でも容易に中に侵入して作物に危害を及ぼす事のできるのですよね。でもそんな事をしないのは、同じ地域で暮らす人同士の、暗黙の了解や目に見えない掟があったり、お互いの信頼関係が築かれていたりするからなのだ、と気が付きました。

おじいちゃんはその後、アパートから少し離れた所にある空き地を借りて畑作業をするようになりました。その畑の周囲はぐるっと柵で囲まれて、入口には鍵が掛けられるようになりました。トマトなどを植えていたアパート前の畑は雑草が生えて物置きスペースに代わり、おじいちゃん達の立ち話風景を見る事もなくなりました。

東京の暮らしに慣れてきた私は、事務所の窓から畑が見えなくても、以前のように息が詰まる事はなくなりました。それでも、育っていくトマトが見れなかったり、おじいちゃんたちの立ち話がもれ聞こえてこなくて、さびしく思います。人と人の楽しい会話、作物が育っていく姿というのは、前向きな力を持っていて、周りにいる人にも良い影響を与えていたのではないかと思います。今は静かな事が多いあいあいネット事務所ですが、いつかおじいちゃんの畑のように、人が集い、新しい力が育まれる場所になれたらいいなあと思っています。



あいあいネット理事対談

まなびあいの立ち位置—当事者と外部者の狭間で—

ニュースレター第1号の特集企画は、あいあいネット理事2名による対談です。それぞれ東京と京都に住み、フィールドもアフリカとインドネシアと異なる壽賀理事と増田理事。別々に活動する機会が多い中、それぞれどんな思いであいあいネットに関わっているのか、“まなびあい”をキーワードに話をしてもらいました。

高田: まずは壽賀さんが最初にあいあいネットに関わったきっかけを教えてくださいませんか？

壽賀: 2005年の勉強会の時。長畑さんや島上さんはもう動きだして、連続で勉強会を始めていた。その連続勉強会の割と初めの方に何かで案内を見て、面白そうだなと思って、奉仕園での勉強会に参加したのがきっかけ。

増田: その時“いりあい・よりあい・まなびあい”はすでに一つのキーワードだったんですか？

壽賀: そうだったと思う。自分がそれに近い関心を現場で持っていたこともあって、その名前、コンセプトに惹かれた。それで面白くなって、その後の勉強会にも継続して来るようになった。

高田: では、勉強会にしばらく参加するというのが続いていたと？

壽賀: そうだね。その中である程度知っていた人もいたわけで、少し早く行って手伝う位は自然にしていた。そんな感じで、ずるずるずる・・・という感じかな。

高田: 増田さんもお聞きしていいですか？

増田: 2000年～2005年の間で3年位インドネシアのスマトラ島にいたんですね。そこで村の調査をしていたんですけど、その村では慣習の森をめぐる争いがあったんです。一つは油ヤシプランテーションにしようとする企業と住民との間の争い。もう一つは、住民の間で慣習の森を、リーダーと普通の人の間で森をどう分けるか・どうするかでもめていました。さらに油ヤシ栽培が流行っているの、みん

なで持つ森をやめてもっと個人分配しようみたいな話にもなっていて、その境界をめぐる争いがあったりして、毎日のようにみんな土地の事でもめていて、なんとかならないのかなと思っていましたね。僕は慣習の事はよくわからないし、外部者の僕が横から口を出すのもなんだなと思っていたので、その時は状況を見ているだけで、そのまま日本に帰国しました。

それから1年経ったある日、島上さんが京都大学でいりあい交流のインドネシアに行っていた時の報告会をしたんですよ。それで、自分と同じような事に関心を持ってやっている人がいる、しかもすごいなと思ったのは、日本でもいりあい問題があって、それとインドネシアの問題とつなげて同時にリンクしながらやっていて、日本人としてちゃんとその問題をインドネシア側に発信している、うまくつないでいる、“ああ、こういうやり方があるんだ”と、目からうろこだったんです。その数カ月後にいりあい交流第二弾があって、そこから参加するようになりました。それが始まりです。

壽賀: お互いに現場があって関心・問題意識を持っていたところにあいあいネットが現われたという感じで、まさに増田さんはあつと思ったんだろうし、自分はそういうのをキーワードにしてやっていくグループが出てきたんだ、という事で惹かれていったんだね。

高田: 壽賀さんは海外と日本の地域をつなぐ事に意識が向きだしたのは、いつ頃でしょうか？

壽賀: 自分にとって一番大きいのは97年のアジア農民交流センターとの出会い。増田さんが島上さんに会って「あつ」って思ったみたいに、自分はアジア農民交流センターを見て、「じゃあ、NGOって何なの？」って思った。アジア農民交流センターは日本の農民とアジアの農民の当事者交流を行う団体で、1997年の第二次立ち上げに参加した。その時、当事者同士がダイレクトにつながるまなびあいを目の当たりに見せられて…。できる訳だよ。そこにはNGOが介入する必要はない訳。JVC（日本国際ボランティアセンター）が一応いて、事前の車の手配とか、スタッフがついて通訳したりはしたけど、山形の農民



壽賀一仁 (写真中央) …東京都調布市在住、あいあいネット理事。長年勤めた日本国際ボランティアセンター（JVC）職員を今年退職。現在はフリーランスで世界各地（主にアフリカ）の地域づくりに関わっている。ジンバブウェや山梨県の村とは、個人的に関わり合いを続けている。

増田和也 (写真右) …京都市在住、あいあいネット理事／京都大学研究員。専門は文化人類学、東南アジア地域研究。インドネシアのスマトラ島を主なフィールドにしているほか、滋賀県北部の山村での「くらしの森」づくりに関わっている。

聞き手／高田尚子 (写真左) …あいあいネット事務局

の中には若い頃タイで働いていてタイ語がペラペラの人が村にいたりもして。そうするともう、全く知らないんだよね。そういうすごさを目の当たりに見た中で、じゃあ、当事者間をいい意味で広げるにはどうしたらいいんだろうとか、自分としての当事者性はどこにあるのとか、どういう当事者としてそういう直接の交流に関われるのか、という問題意識をずっと持ってきた。

高田： どのような当事者意識を持てるかというのは、具体的にはどんな行動変化につながったんですか？

壽賀： そういう意識が出てきて、自分がただ寝に帰るだけだった、でも結局もう25年住んでいる地元の調布とどう関わるか考えるようになった。海外から帰ってきてから、ようやく地元の八幡様のお祭りの会に入れてもらえたり、まちづくりの会に引っ張り出されたりとか、そういうのを断らずに、機会を見つけては入って引き受けるようになった。それに加えてあいあいネットみたいな所とも関わりを持つという事が、アジア農民交流センターで衝撃を受けた事から始まった、自分の当事者性を問うことの一つのプロセス。自分なりの当事者性をもっと意識して、そういう自分として交流に関わる。自分が調布をベースにやること。あいあいネットにしても、アジア農民交流センターにしても、ジンバブウェとの関わりも、その反映かな。

—当事者間のまなびあいを広げる、自分としての当事者性はどこにあるのか？

高田： いろいろ交流は、当事者同士の交流を側面からサポートした形じゃないかと聞いていて思ったんですが、壽賀さんがアジア農民交流センターで見られたのと似たような形と思っていいんでしょうか？

増田： 僕はつなぐとというよりも、なんかこの輪に関わりたいなと思って参加してます。それをするためには、とりあえずお手伝いでしょ、みたいな。お手伝いという立場で、当事者の輪の中に関わった。

壽賀： 増田さん自身も、一人の増田さんとしてその輪の中に入りたかったって事ですよ。日本とインドネシアに両者がいて、これをつなぐつなぎ手という立ち位置ではなく、その中に一員として入りたかったって事ですよ。

壽賀： あいあいネットの人たちは割とそういう感じなんじゃないかな。自分も一人として関わる、輪に入る。南南交流みたいな形で、自分をつなぎ手で距離を置いた、ツールとして交流を考えるというのはニュアンスがみんな違うような気がする。

高田： 輪の中に自分もいるという感覚、それっていいですね。

壽賀： その為にはね、こっちも当事者に思われたいといけないんだよね。

壽賀： 増田さんは最初フィールドに入られた時、どういう人間として向こうの人に説明し認識されてたんですか？自分なんか完全に緊急救援だったり復興支援だったり、援助をしてくれるNGOという認識が固まっている、その一員として入っている訳だよね。最初に行ったエチオピアもその歴史が長いから、向こうもNGOの人として、逆に認識できるからその枠の中ではすっと受け入れてくれる訳だけど、それをどう壊して出るかというのは中々大変。こっちが交流の輪の中で同じ当事者として入りたいんだと思っても、向こう側としてはそうはならない。NGOっていう枠の中では難しいというか。増田さんとか、研究者の卵という理解をされて入る訳ですか？



増田： そうですね。森の利用の慣習について教えてください、という形です。

壽賀： 教えてもらう、研究者の卵として入っていった時、村の人はそれが腑に落ちて関係が作られだしたようなものなの？それとも、よく分からないけどまあいいか、若い者が関心を持ってるからとか。

増田： 最初はよく分からなかったみたいですね。そこは昔ながらの伝統芸能が残っている所で、僕の前にも研究者が入った事があったんですね。僕が行ったときにも、また同じような事をする奴だと思われました。でも僕は伝統芸能ではなく、具体的に森をどう使っているか知りたかったので、全然理解してくれなかったんですよ。森と一緒にいきたいと言っても、森は遠いからとか危険だからとか、あんまり信用してくれなくて。でも毎回のようによくついて行って、ようやく3カ月目くらいに「一緒に川に行くか」という話になって、喜んでついていった。その後、森で籐（ロタン）を取るのにも一緒についていくようになって、そんな中で、「こいつは昔の口承や儀礼とかよりもこういう事が知りたいんだ」って事が伝わって、その後は色々と一緒にに行けるようになりました。でも、一緒に手伝ったりするにも関わらず、参加メンバー全員で割る収入を僕は受け取らないので、村の人は僕をおかしな奴だと思っているみたいです。隣の村の人からも、どこどこ村は

まなびあいの立ち位置—当事者と外部者の狭間で

日本人をタダで使っているって言われたりして。

壽賀：今のはすごく面白い所だと思うんですけど、そうやって理解されてきて輪にも入れてもらえて、お金をもらうっていう選択肢もあるじゃないですか。仲間として一緒にやって、これはおまえの取り分だからとってもらおう。そこでもらわないのは、増田さんなりに一線があったんですか？

増田：僕は調査で行ってデータを取らせてもらっているというのがあって。一方で本当は僕がそこを手伝ってしまうとデータが狂ってしまう。本当はこの人数で何日間・何時間やっているかを知りたいので、本当は僕がいるのを隠したかったくらい。あと僕は全然村人とは対等に働けていない。村の人が籐を10本とる間に僕はようやく1本というところ。そういう中でとても取り分なんてもらえなかったです。せいぜいご飯のおこぼれをもらうくらい。

壽賀：その辺って個々人の考え方やスタンスの取り方もあると思うけど、割と面白いところだと思うんだよね。自分も輪の中に入って一緒にやって、まなびあってとか。学術調査といったら、それはもちろん別の目的で余計な事が入らないようにはあるんだろうけど、そこでそういうオファーをされるかどうか、受け取るか受け取らないか、どこでどんなスタンスをとるか、相手もどんなスタンスを取るかというのは、割と小さい事のように思われるけど、もしかしたら大事かもしれないあって思ったりするんだよね。いわゆるNGOレギュレーション的な、なれあいや不正を避けるために一線を引くのかそうじゃないのとかって、割と交流とかまなびあいとかの感覚と裏表のような気がして、ちょっと関心があったんだよね。

高田：NGO活動の世界ではあまり聞かない話ですよ。

壽賀：NGOでは絶対ノーなんじゃない。規則上は一応。

高田：壽賀さんはジンバブウェとかで個人で村に入っていく場合、自分はどんな人として入っていくんですか？

壽賀：ジンバブウェはそういう意識があって、JVCを休職して行ったところ。今一番通っているジンバブウェ中部の村は、住民組織の親分が俺の所で受けてやるよとなった。その親分はスタディーツアーで日本に呼んだことがあって、村には「親分の友達」として紹介してもらった形で入った。親分が日本に行った時に世話になった人だからちゃんとしなきゃみたいな感じで。親しくなった後でもいわゆる援助リクエストもなく付き合い合っている。NGOの援助プロジェクトで入って、途中で自分の認識を変えていくのは相当難しかったと思う。今回

話を聞いていて、逆に増田さんや島上さんのように、研究者というのは意外に障害にならないんだなって思った。

増田：分野によるかもしれません。僕が知っている理系分野の人は、高い機材をばっと買ったりしてお金の掛け方が違うんですよ。たとえば、僕の通う村では川で魚を穫っている人がいるんですけど、みんなエンジンのついた船は高いから持ってなくて手こぎのカヌーだったんですね。同じ地域で調査している理系の研究者を訪れたことがあるのですが、エンジン付きのボートを買って、高そうな機器を設置していて、村の人はこういうのをどう見ているのかな、と思ったことがあります。きっと、村びとにとっては、すごいインパクトでしょうね。当時、僕は自費で渡航していたこともあって、とてもそういう事はできなくて……。



いりあい交流・トンプ集落にて（写真左手前が増田さん）

高田：それで、調査が終わるとばあつといなくなっちゃうんですかね。

増田：そうですね。すべての理系の方がそうではないのかもしれませんが、彼らの関心は人びとの暮らしの事よりもむしろ、生えている植物がどうだとか、雨の量がどうなのかとか そういう事が重要なのだろうし。僕の関心はやっぱり人の暮らしのことが 中心ですし、なるべく多くの人から話を聞いて、この村と長く関わりたいと思っていたので、必要最低限以上のお金はあまり渡さなかったですね。特定の誰かにお金を渡したら絶対に不公平じゃないですか。そこまでお金もなかったです。だから、一緒に作業を手伝いながら、労働で返そうと思った。だから、ケチと言われたこともありましたが、今でもなるべく労働やお土産で返しています。

壽賀：人や人の暮らしについて関心がある・学びたい人たちは、現地の人との接点が多くて親和性があるんだよね。でもそうするとやっぱり、今度は自分も色々聞かれるわけだよね。やっぱり“まなびあい”でさ、教えて下さいだけじゃなくて、おまえはどうなんだとかも当然聞かれる。今度は自分で発信していくもの、返していくもので自分が問われてく

るんだよね。

高田：誰かと仲良くなろうと思ったら相手の事を知るだけじゃなくて、自分の方も心を開いて自分を伝えて行かないとその先に行けないような気がしますね。

増田：僕が村の人から言われたのは、「おまえは俺達のこと色々観察したりメモしたりしているけど、俺達だっておまえのこと見てるんだ」って言われてドキッとしました。それ以来行儀よくしています。

壽賀：まなびあいって意味で、こっちは学んでいるけど、相手が学びたいものをこっちがどの程度提供しているかということとはしばしば考えますね。

—おまえは俺達のこと色々観察したりメモしたりしているけども、俺達だっておまえのこと見てるんだって言われてドキッとした。

高田：NGOと研究と、それぞれの道を歩いてきた方がこうやってお茶飲みながら話ができて、そんな中でいりあい交流などの活動もできてっていうのが、可能性を感じます。

壽賀：たぶん研究と国際協力系のNGOの、どちらからも微妙にはずれているから接点があるという感じだと思うのね。ピュアにアカデミズムの世界にいる人、また一方でピュアにこっちで援助スキームまわしている人がある時出会って異業種交流をしてってやっても、こうはならないのかなって気はするんだよね。いい悪いではなくて、それぞれのいい意味ではみ出てる人たちが接点があるから、こうなっているのかなって。

増田：すごく前向きなとらえ方ですね。僕はいつも

マイナスに感じていて、どれも中途半端だなんて思っているんですよ。日本の地域でもそこに住んでなくて、外部者がたまに来てなんかやってるなって感じで。更にここのところ現場の数が増えてしまって、どれも中途半端で終わってて、もっと絞る形で一カ所ちゃんとやらなきゃなって思っています。

高田：最後に一番最近思った、あいあいネットに関わって良かった事を教えて下さい。

増田：最近だと、今年の6月に和田さん※1と中田さん※2のお話を聞いた事です。事実質問というのは2人のファシリテーションの原点だと思ったし、僕の今までの村人への質問はそれからはずれたような質問をしていたんだなと思って、改めてこれまでの関わりの事を思いました。意識を変えてまた向かおうかなと思っています。それから、僕ははみ出たうえに中途半端だなんて思っているんですけど、あいあいネットの他の方って自分のやりたい事を明確にぱしっとやっている印象を持っていて、自分もこういう形でやるともう少し具体的な形になる、という指針になっていると思っています。具体的にこうやっていけば自分のモヤモヤしたものが見えてくるのかなとか。

壽賀：増田さんが後半言った事と重なるんだけど、たぶん一番は、それぞれ通ってきた経路は違っても、自分が問題意識を持っている事・関心を持っている事と近い人たち、それぞれ年齢差・世代差とかあっても、それぞれ取り組んでいる人たちがいるんだと思えるのが、あいあいネットの一番の良さかな。共感してまなびあえる仲間がここにはいるんだという事が、直接的には一番大きい。それから、トンプの**いしむしろ** **くつき** パパジャニやヘダールさん、石筵、朽木など、それぞれの場所で暮らしている当事者が具体的に顔が見える形でつながっているという事が、もう一つ大きい事だね。

インドネシアとあいあいネットの主なプロジェクト地



私のオススメ地域

「西原（さいはら）」（山梨県上野原市）

新宿から上野原までJR中央線で約1時間。そこからバスで50分行くと山梨県上野原市西原（さいはら）に着く。東京都に隣接する標高600mの西原は、昭和40年代にはその南の桐原とならぶ長寿の山村として有名だった。しかし、高度経済成長で林業と養蚕業が廃れるとともに三多摩地方での勤労所得で現金収入が増え、生活様式と食生活は大きく変化した。その結果、働き盛りの世代では短命化が進み、村は過疎化していった。

だが、西原の長寿を支えた在来の雑穀類やイモ類、マメ類は、現在も作り続けられている。雑穀が伝統的に栽培されているアフリカを主なフィールドとする私は、雑穀がつなぐ縁で3年前から西原の篤農家にとときおじゃましている。猫の手ほどの役にも立たない農作業の手伝いだが、作業の後の伝統料理づくりと雑穀談義はいつも楽しい。

そんな西原に最近元気な動きがある。近くの大学から西原に通っていたAさんと古民家宿をやるのが夢のKさんという「風」の人2人が西原に移住し、地域のお師匠さんたちからまなびはじめたのが数年前。地域の「窓」のように2人を通じて外の風が流れ込むと、刺激を受けた西原の「土」の人も動き出して、山村の生活文化を軸にしたさまざまな取り組みが始まっている。外部のコンサルタントやNPO主導でない動きをぜひ一度訪ねてみてほしい。詳しくは“やさいはらブログ” <http://ameblo.jp/biryukan/> とそのなかのブックマークからどうぞ。

壽賀一仁（あいあいネット理事）



写真(左から)

西原の原集落の風景／ご先祖様に捧げた雑穀(翌年の種にする)／元気な西原の仲間たち(新年会にて)

□□最近の主なスケジュール（2010年7月～2011年1月）□□

- 7月 インドネシア短期専門家派遣（5/23-7/12）
「住民主体のコミュニティ開発A」研修受入（6/27-7/22）
「持続的農村開発」研修協力（7/22-24）
インドネシア・西バリプロジェクト、現地研修（7/22-8/15）
- 8月 あいあいネット総会（8/21）
「住民主体のコミュニティ開発B」研修受入（8/29-9/23）
- 9月 「ウガンダ北部地域行政官能力向上」研修受入（9/13-10/8）
コミュニティ・ファシリテーション内外交流会第一回（9/26）
- 10月 「コロンビア投降兵士および受入コミュニティのための起業就業支援事業強化」研修受入（10/6-10/15）
西バリプロジェクト報告会（10/26）
- 11月 「インドネシア参加型公園管理」研修受入（11/1-11/26）
インドネシア・西バリプロジェクト、現地研修（11月末～12月）
あいあいネット中期計画ミーティング

☆事務所オープンDAY始めました☆

毎月第一土曜日（13:00～16:00）が、あいあいネット事務所オープンDAYとなりました！コミュニティ開発、ファシリテーション、地元学、インドネシア等の専門書を読んだり、いりあい交流の映像記録を見たり、あいあいネットスタッフとおしゃべりしたり、気軽な気持ちでぜひ遊びに来て下さい。お茶とお菓子を用意してお待ちしております♪（お越しの際は電話、Email等でご一報頂けると嬉しいです。）

〈今後のオープンDAY〉

12月4日、1月8日、2月5日
…以降も毎月開催します



お知らせ



和田・中田ファシリテーション手法の集大成が本になりました！

「途上国の人々との話し方—国際協力メタファシリテーションの手法—」

和田信明、中田豊一著 みずのわ出版 3,500円+税

※詳細はあいあいネットブログ (<http://i-i-net.seesaa.net/>) をご参照下さい。

2010年11月10日

発行：一般社団法人あいあいネット
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場
1-17-10 稲穂コーポ2A
Tel/Fax：03-3204-1316

発行者：和田信明
編集：高田尚子